

音

竹の節

初篇  
天



竹草菴輯著  
長谷川自信畫圖  
和田正兵衛筆工

音曲  
仲乃一節

浪華  
金隨堂梓

一名佐和里都二  
以津初編全三冊











Handwritten calligraphy in cursive style (sōsho) within a rectangular frame. The text is arranged in several vertical columns, with decorative horizontal lines and dots separating the columns.

有予舊蔵版ふか通が  
文章たるものなり申  
奇と云と撰て寒  
表寸其筆ヤりり  
従横たるものなり

金隨堂主人



天正のちろ小野通一侍

七女つづ元織田大守付

仕革命の後豊太閤

の侍女う高基院

殿其稀ヲ愛すそ

源氏物治ゆきま

乃らふ著者ゆ命ゆ

三河矢掛の長者う娘

淨瑠理姫源の牛若

丸懸想下始末と

溪とよき筆つり





長生殿士段の物語と号  
 奉る二名と浄る物語  
 ともりの長浄より起元  
 改訂當道の開祖と以後  
 塩川志摩守の嫁男女  
 二女産る娘伏女秀吉とて  
 誘ひ獲る陣一艶のまゝ  
 鳴呼不幸にそ戦国  
 の文筆負代産上世の  
 敬文盛る代を育てん  
 惣女奴子遠しといへん



浄瑠璃 近松門左衛門

夫辞世まやど

とて

そのほか

のちのち

まやど

浄瑠璃 角澤檢校

なま



躰元祖 棟隆達

さざり

さざり

さざり

さざり

さざり

さざり

さざり



〇〇  
浄瑠璃太夫  
三絃元祖

角澤檢校

性國泉乃塲うそ  
三絃小手紳しん

小奇こきの奇き人ひと守まもりが古ふる岩いわ船ふね檢けん校ぎょうしらある琵琶びわの名人めいじんの  
式しき時とき豊とよ太た閤がくの政せい手て彼かの十二じふに段だん物ものがり御ご覽らんし其その文ぶん好こう  
但たちちるるぬぬと感かん掌てうははししくく彼かの岩いわ船ふねににわわくく節ふしをつつけ  
と世よ聞きででばばままいいししららああるる其その太た閤がく三さん味み線せんとといいふふののちちうう右みぎ手て  
手てはは爪つめのの骨ほねとといいふふかかきき鳴ないい拍はく子しとといいふふかかけけとと其その后のち  
此こ角かく澤さく初はつめめとといいふふとと三さん味み線せんふふ合あひひてて沿かたりり出いででししよよ漸しんららうう節ふし  
とと専せんらら世よふふままりりとといいふふつつのの小こ曲まがの惣そう名なとといいふふ  
△此こ角かく澤さく子こ澤さくとといいふふくく鶴つる澤さく豊とよ澤さく是これよりより出いででししままりり

右の義とのつて藝殿抵と作らる

○浄瑠璃作者中興元祖

# 近松門左衛門

本性枚森氏を伊豫  
國松山産号は平安堂

巢林子名づつ若かば時志づつく京家お仕へし故つて

肥前唐津の近松寺に念をく禅法修し又二変して歸洛

都万大夫座のかき狂言とつてや毎度新字妙作出口り夫

とる大阪竹本筑後の操座の浄より文作まるとも趣向

意外ふいづきを諸人こきとあひ巻し近松が新浄

だふくも其芝居究めて大入をすしとてく生涯に二百余

をんの浄瑠璃とほるとは是作者隨一と云

三題都々惣元祖

江ノ東

隆達

日蓮宗の僧にて泉原  
塙けんがまの院内に住

今生附其声たうらとく奔まももる時公權人の取とさむけ感動  
あるつふふ二る音曲と唄出さく世の人隆達平と唄ふ  
折作と題とさく其沙を堂上よきとて或年大内え屋に  
折しもたも風吹きさくりて沖簾もゆるふ吹上るほどたじと  
令らつとけ有さるも唄へよと唄らじかどりらへぞ

ふけよ山風あつれよ公廉をその上筋のかやうんこや

御感どらつてたつとほらびまわり今世をやる三賢都々一  
おとのつらさめ惣元祖とさくいせん

極浦堯軍記

琴弓責のぞん

身みのたが極たが短たがとたが又たがたたがせたがとたがつたがぐたが其たが家たがのたが結たが

のたが極たが也たがとたが又たがたたがせたがとたがつたがぐたが其たが家たがのたが氏たがをたがせたがの

とたが又たがのたがはたが理たがめたがひたがじたがとたが又たがつたがぐたが其たが家たがのたが業たが

後たがもたが北たが乃たがとたが禁たがめたがのたがあたがとたが法たがたたがのたが川たが

以たが取たが留たが時たが法たが食たがのたが殺たが食たがにたがあたがとたが又たが其たが家たがのたが業たが

私司次帝を忠極の義を護りて侍る

是て臣の事なりとて私を以て

くみすむす積智仁の勇まのや

同席にお坐る永方の往連南

奈々の建まらぬと申す事あり

助成と号して七代永清の事あり





回人<sup>かへうじん</sup>多<sup>おほ</sup>死<sup>し</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>せ<sup>せ</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>  
と<sup>と</sup>が<sup>が</sup>く<sup>く</sup>入<sup>い</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>福<sup>ふく</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>め<sup>め</sup>の<sup>の</sup>徳<sup>とく</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>  
て<sup>て</sup>縁<sup>ゆかり</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>わ<sup>わ</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>な<sup>な</sup>  
ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>き<sup>き</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>わ<sup>わ</sup>い<sup>い</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>  
久<sup>く</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>わ<sup>わ</sup>い<sup>い</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>  
う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>わ<sup>わ</sup>い<sup>い</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>わ<sup>わ</sup>い<sup>い</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>あ<sup>あ</sup>

トーろいりふゆわ

しんもあまが

廿四孝四

おいさおはらもあまが  
 じりせぬおとろくまえ  
 せん香名馬のからあつ  
 あづるいといふあ  
 ちあづるいといふあ  
 ぞうれいあまがあまが

あまがあまが

あまがあまが



公王源

ナハル 初春

トニすのふとろと

千両敵 男力ふりてぐ

ボウ ぶつさ宛  
望んば所をさむるを

男まむひのまのむすう女

まふふとむめは家

けののあねたをむすえ

はるめいんはむすう女

らるんてむすう女

所、めやとやめ  
むすう女

人、氣  
山

りな例 矢

あくと



勝男節  
山

梅河矢  
山

ドニかゆひされとち

じうのまよ

堀川後

そちのまよのまよ

かゆひのまよ

あまのまよ

あまのまよ

あまのまよ

あまのまよ

あまのまよ

あまのまよ



ド一 ひまめをた

理藤村

ふ下とふふ

あま  
余りゆひをた

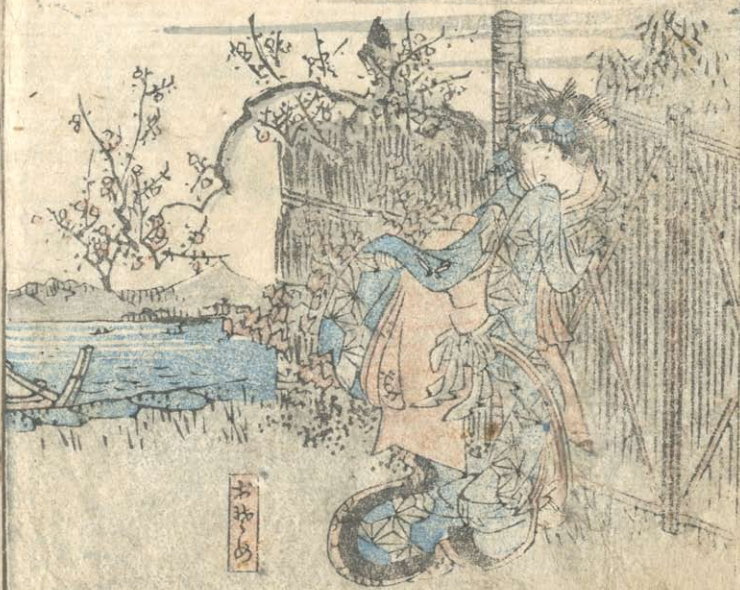
うさゆゆあひと

あざりあひと

つひてあひと

あま  
あまら

つれあひと



おあめ

ド一 おろろめさひちと  
千本すや ありのわかれそ

なごころえれてぬ

ぬきごととて雲井お

ちうんを交をらわ

れびすめがわれ

らふまよら

とらひ女房の  
あらかうこ



ド  
一 おりふりしるゝ

約員中や  
あつめあせ入

あまのついでに  
あまのついでに

あまのついでに  
あまのついでに

あまのついでに  
あまのついでに

あまのついでに  
あまのついでに

あまのついでに  
あまのついでに

あまのついでに  
あまのついでに

あまのついでに  
あまのついでに







ド一 終の歌凡れ

いり候別 あはれをこころごとく

あはれをこころごとく

あはれをこころごとく

あはれをこころごとく

あはれをこころごとく

流浪

これと松む

まもわそ



ドニ  
マがれうぶまて

あちこち係せんの

安達三

お孫ひつなきん死

めいじのまゝお孫

のち氣に成じお孫

毎のまにまに

づゝる目あき

くちうするま

おやねを



ト一

つめの 意路れ

うゑぬらう

忠カ

ついでに 意路れ

ついでに 意路れ

ついでに 意路れ

ついでに 意路れ

ついでに 意路れ

ついでに 意路れ

とけい  
うねい  
うねい



ドニ

人めあの人で

こひぢれせんと

新井村

そまのあふごぎん

あまをうらひし

あまをうらひし

あまをうらひし

とへく

あまをうらひし

あまをうらひし



ドニ おやまへのうんげんと

ありつゝわかれ

祇園内

ありあへんせくそ

かきくがあぐも川へ

流きてくゆたるが

くさでのまわらふ

うんさすものも  
ぬしめとせん



ド一

さやどおまへへ

あつちるあふ

三浦まねん

まじりありのてん  
あつちるあふま  
あつちるあふま  
あつちるあふま  
あつちるあふま  
あつちるあふま  
あつちるあふま  
あつちるあふま

あいつづつしる

やどがちる



三浦まねん

あつちる

ドニのぼりつめさる

二うのおちましご

ちあやの辰

おどおどたれつ満

乳せんらむじろぬき

親なつたぬき

やまけくあさめめ

めしらちしと

今さらめがさめ

あさらめさ





此大聲圓の儀、淨福徳の元祖竹中兼善が夫生時よりおぼろひなる  
 け業平生用ひしれ、此氣平命と申福徳の師方曲の司と云物もあはれじ  
 竹中氏の内外傳りも、厚恩の爲業方と申生福徳に、こゝろの  
 ○第一腎精と申氣血を養ひ食すむ。○むらゝの精は、おぼろひの  
 け出の心と申、我れ物もく信又精



竹本筭前大縁秘方  
**大聲圓**

一斗りル  
 曲西入二  
 而相

○又聲と申す時、  
 志と申すは、

用しくせめと云老病候と正物と云は、此大縁と申す。○おん六の初と云は  
 ○唐茶用ひ強と云は、此と云は、血納め乳汁と云は、夫婦和食天地  
 同調と云は、縁代徳の第一と云は、名勝の人精と云は、此の儀は、婦人  
 にも、此の儀、用ひ骨を、此の儀、此の儀、此の儀、此の儀、此の儀、此の儀、  
 ○此の儀、此の儀、此の儀、此の儀、此の儀、此の儀、

**本家調合所**

大坂をへて、後河内

綿屋喜兵衛製

此の儀、此の儀、此の儀、此の儀、此の儀、此の儀、